The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「現場力」と「身体」から生まれたプロジェクト
Author(s)	西村, ユミ
Citation	Communication-Design 特別号. 2016, 1, p. 130-139
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55656
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「現場力」と「身体」から生まれたプロジェクト

西村 ユミ

KEYWORDS

現場力

身体

コミュニケーションデザイン

AUTHOR

西村 ユミ ｜ Yumi Nishimura
首都大学東京　教授
2005 ～ 2011 年度　臨床部門　准教授

専門は看護学。看護場面における実践知・身体知、および遺伝カウンセリング参加者の実践や病いの経験に関する記述的研究を行う。同時に、メルロ＝ポンティの現象学（身体論）を手がかりにして、実践や経験にアプローチする方法論の検討を進めている。

1

現場＝生活実践の場として

私がCSCDに着任したのは、設立された1年後だった。1年間の非常勤講師を経てから合流したためにある程度の状況を知ってはいたが、その頃のCSCDは、すべてを作りつつある状態で、最初に臨んだのは大学院共通科目を考案することだった。

CSCDは当時4つのセクションに分かれていて、私はそのうちの臨床部門のメンバーの一人となった。このメンバーで授業を提供していくのだが、人類学者、看護と臨床哲学を実践する者、ADR（Alternative Dispute Resolution、裁判外紛争解決手続）の専門家、そして私という4名は、専門も発想も違っており、たくさんの議論が必要になった。集まって話し合うスタイル、授業に対するイメージ、言葉の使い方、話をする時のテンション等々のどれもが違っていた。そのため、毎日毎日、何かを話し合っていた。

さらに、私は「身体」に関心があり、これをテーマとした授業も考えていた。臨床部門として、Human CareやPracticeを柱とした科目を検討しつつ、そこに身体を置いたら、何がテーマとなるだろうか。経緯は忘れてしまったが、その際に注目したのが「現場」という言葉だった。現場は、ある専門的な実践が行われる場のことのみを言うのではなく、私たちの生活実践がなされる場それ自体である。そのようなスタンスで、「現場」という言葉を選んだように記憶している。「この「現場」の「力」「知恵」のことを「現場力」と呼びたい」。「この言葉を使った授業科目があるといいだろう」。そのような希望に基づいて議論を行った結果、「現場力と実践知」という科目が誕生した。（後に「身体コミュニケーション」に改変された）シラバスには、「現場力とは、履修者が身を置く場において、その場や場を構成している人々の間に生成する実践のかたちと働きのこと」「この力は、一方で熟考されつつも、他方でそれとして自覚する手前で営まれている」「それ自体をいかに働かせて実践を営んでいるのかを言葉にすることは困難です」と記された。このように現場力を紹介し、実践と対話を通して現場力の言語化を目指す、それがこの授業の方向性だった。言い換えると、現場力は授業を介して言語化され、その意味も問われつつ与えられていくものとして理解されたのだ。

授業の科目名にもなった「現場力」。この言葉は、十分に練られておらず、まだまだ検討の余地を残していた。そのため、別の場で議論をしてもっと深めていこう、という提案がなされ、「現場力研究会」[a]が産声を上げた。これを私が運営することになったのだが、始めた当初は、何かに憑りつかれたように1週間に1度、午前中の2時間程度を使って盛んに議論をした。議論というよりも、バトルと言った方が適切であるかもしれない。

さらに、「現場力」は新たな展開を見せた。この授業メンバーの数人で、「からだトーク(*b)」という身体（ダンス）のワークショップをしよう、という提案もなされ、これを企画・運営した。ジャワ舞踊家のダンサーである佐久間新さんと理学療法士であり哲学者でもある玉地雅浩さんをゲストとして、CSCDのメンバー3名と始めたこの企画は、学内外で不定期に開催され、学生だけではなく、大学事務員、地域の人、通りかかった人など、様々な人が参加をしてくれた。

「現場力」「身体」を柱として動き始めた授業、研究会、ワークショップは、CSCDが掲げた3つのミッションである「人材育成」「コミュニケーション研究」「社学連携」を横断する形で取り組んだ活動であると考える。新しいものを作っていくという「試み」の中で、毎日のように議論を重ね、自分たちの存在意義を考えつつ組み立てる企画の中で、自ずとできあがった運動体であった。この運動は、CSCDがつねに他と接し、学際的であろうとする意志を持っていたこと、つねに地域に開かれて、大学と社会という二項対立を退けようとする意志を持っていたこと、この越境を授業科目の中で発揮しようとしたことから生み出された。

2

授業科目：「現場力と実践知」

さて、改めてどのような授業をしていたのかを振り返ってみたい。私たちが求めたのは、「現場力」がどのような営みであり、知（力）であるのか。それが、私たちの人としての暮らし、生きること等々をいかに支えてくれているのかを、議論や実践を通して、言い換えると、身体を介して考えることであった。履修生や授業を行う教員、ゲストとともに作り出すことであった。臨床コミュニケーションを担当したのは、池田光穂さん、西川勝さん、中西淑美さんだったが、ここに志賀玲子さん、本間直樹さん、高橋綾さん、ゲストスピーカーの佐久間新さん等々が加わって行われた、複数人で模索しつつ作る授業だった。後に、平井啓さん、宮本友介さんなどが合流した。

この授業の特徴とも言える第1の点は、CSCDが重視していた“分野を超えた”“学際的な”という言葉があまり意味をなさない点であるだろう。上述したメンバーについて、既存の枠組みでその専門性を紹介すると、人類学、看護学、臨床哲学、ダンスのプロデュース、ダンス等々である。しかし、私たちの関心は、日常のごくごく当たり前の生活の中で行っていること、その行いの起点を生きられた身体が担っていること、それによって、私たちの生きることがいかに支えられているのかを問うことである。そうであれば、「現場力」は、学問の専門分野が分かれる手前の私たちの日常的な営みである。

が、それにもかかわらず、しばしば学生たちは、各々の専門分野の専門用語でこれを説明しようとした。学生たちには（もちろん教員にも）、それほどまでに専門的な知識が身体化されており、授業での議論を通してこのことに気づかされた。その意味で、“分野を超えた”が活かされていた授業だったと言える。各自が知らぬ間にもっている前提に気づかされ、それを換骨奪胎する作業を始める場が、この議論の場だったのだ。

この日常的な営みへの注目は、現代思想の現象学という哲学の考え方が、私を支えていたためでもある。しかし、この現象学を前面に出すと、現象学の専門性に囚われることになり、専門家と非専門家との二分を生じさせる。そのため、現象学という言葉や記述を紹介したとしても、その知識を得ることやこれをもとに議論するのではなく、考え方を背後に据えて、様々な営み――タイプを打つなどについて考えることの方に重きを置いた授業を行った。時折、知識を必要とする学生から質問を受けることもあったが、それは歓迎した。知識は予め注入されるものではなく、渇望して手に入れるものという考えをどこかで持っていたためであろう。他方で、その当時は、知識の提供と議論とのバランスに悩んでもいた。新たな知識が議論の枠組みを押し広げたり、他の視点を得ることを可能にしたりするし、何よりも研究を日常としている学生たちにとっては、研究に生かせる可能性のある知を探し続けることも、習慣になっていたに違いない。それに応えるのも、私たちの役割である。

加えて、日常を問うたことは、「現場力研究会」を立ち上げてすぐに『生き方の人類学』［田辺　2003］を熱心に読んだこととも関係している。私はこの書物にとても親しみを持った。朝起きて携帯電話の目覚ましを止めて、ベッドから出て歯磨きをする。こうした日常のルーチンは、私たちの動きのリズムや流れをいかに作っているのだろうか。満員電車に乗って大学に向かう、その際に、他の人たちをどんなふうに感じて自分の立ち位置を決めているか。実験中に起こったことをある事柄に注目して記録する、それが意味をもって私たちに現れるのは、いかなる事態なのか等々。これらを問うことを促してくれた。生きて暮らしていくことは、こうした営みの凝縮と崩壊の繰り返しによって成り立っている。これらが「現場力」を理解することの下敷きとなった。

2つ目の特徴は、つねに「身体」に関心を向けていたことだ。現場も実践も、私たちの身体の存在なくしては成り立たない。が、この身体の営みも、はっきり自覚されないことが多い。私たちは世界に働きかけ、世界の方に関心を向けている。その関心を向ける起点となるのが身体であるが、それだからこそ身体は暗がりになる。これを明るみに出すことを、「現場力と実践知」では試みた。一緒に取り組んだのは、ダンスのプロデューサーの志賀さんである。私から見ると、ダンスという営みをプロデュースする仕事では、何らかの水準で身体の営みの言語化を行っている。だから志賀さんは、身体が世界とともに何をしているのかを見えている人と言っていいだろう。

志賀さんとは、授業に向けていつも議論をしていたことを思い出す。自分が歩いてい

る時に、何を感じているのか、何が前に向かう推進力となっているのか、足が地面に着地し、その先へ進む際にはいかなる事態が経験されているのか、前や後ろはいかに感じられているのか等々。それを感じ取り言葉にするために、ゆっくり歩いてみる、後ろ向きに歩いてみる、スピードを上げて歩いてみる、走り抜ける……。これを複数人が一緒に行うことで、他者との距離、他者を避けること、接触や衝突等々も体験され、社会で暮らす中で身体が感じていることを、授業の空間の中で感じて言葉にすることに繋がった。

ダンサーを講師とすることで、共鳴する身体を体験したこともあった。これは、「からだトーク」と連動しているため、後に述べる。

これらの取り組みの後は、毎回、その時に感じたことをメモに残し、それをもとにグループで議論した。授業を始めたばかりの頃は、グループを作ること自体にもたついた。身体が即座に他者へと向かって行かず、自分のいる場所に留まったり、視線を投げてもそれを受け止めてもらえず、行き場を特定できずにいたりする者も多かった。しかし、授業の回数を重ねると、次第に、グループというまとまりがすぐさまできあがるようになった。当初は、受講生同士が互いを知り、声を掛けやすくなったのではないか、集まるということが学習されたり、習慣化されたりしたためではないか、と思っていたが、それだけではないだろう。複数人の身体がまとまるということを覚え、まとまると自ずと声が生まれ、“いつもの”議論が生まれる。もっと適切に言えば、議論をしようとすることへの志向が、まとまる身体を生み出していたのかもしれない。

3

研究活動：「現場力研究会」

CSCD 設立 2 年目から、上述した授業準備を兼ねて「現場力研究会」を開始したことは、既に述べたとおりである。設立当初は、毎週水曜日の午前中、2 時間程度の研究会を行っていた。途中から、1 ヶ月に 1 回のペースになったが、2015 年 6 月までで 162 回開催しているようだ。私は別の大学に移ったため、2012 年 3 月まで参加した。

「現場力」という実践を表す、あるいは力（知）を表す言葉に適切な意味を与えるために、私たちは本を読み、これを講読することにした。本を読んでそれをプレゼンテーションして議論するというスタイルは、従来の「研究」活動が行ってきたことと同じスタイルである。しかし、このある程度共有できているはずのスタイルで行った研究会においても、方法に関する議論が絶えなかった。例えば哲学を専門にしてきた者にとっては、書物は時間をかけて丁寧に読み、様々な解釈の可能性を確認していくものであるようだ。すごいスピードで大量の書物を読んでいくことを推奨する者もいた。1 回の研究

会で1冊というペースで本を読んでプレゼンした者もいた。書籍の種類にもよるだろうが……。

メンバーは、必ずしも書物を読み慣れている者ばかりではなかった。本を読むことを仕事の柱にしていない者も多く、事務員、学外の聴講生であった者やイベントで知り合った者等々、芋づる式に様々な人が集まっては散っていく、その中で定着組もできあがる。そのような状況と「現場力」の熟成が契機となっていたのだろう。次第に、研究会の方法も変わっていた。

この変化は、現場力の理解に向けたもう一つの取り組みにも表れていた。この研究会では、中村雄二郎氏が手掛けた『術語集』[1984] を参考に、「「現場力」研究術語集」(「現場力ノート」へ改編) を著すことも提案され、『オレンジブック』の0号から、毎回、その時期に読んでいる書物をもとに、議論によって受けた刺激を加味して「術語」を選んで、あるいは作って紹介することも開始した。研究会に参加した者が書き手となる。書いた原稿を研究会に出してまた議論できることを狙ったが、多くはギリギリの仕事となり、これも現場力と言って切り抜けた。その成果を幾つか紹介しよう。「「現場力」研究術語集」の0号から2号で紹介した術語である。

0号では、「学習の場としての実践現場」「参加の概念」「私の実践コミュニティ」「「わざ」の習得」「アイデンティフィケーション (identification)」「メティス (策略知)」「表面の経験」「アクティブ・タッチ (Active touch)」「協働的実践 (collaborative practice)」を皆で分担執筆した。1号では、「問題にもとづく学習」「学習のコンテクストの学習」「活動の拡張としての学習」「経験の直接性に含み込まれた他者の経験」「道具を使う」「エージェンシー (Agency、行為者性)」「埋め込み (Embeddedness)」「改善 (KAIZEN) 活動」「協働システムと組織」。2号では「反省的実践」「装置 (dispositifs)」「状況に埋め込まれた行為」「インスクリプション (inscription)」「芸術パフォーマンスにおける即興」「当事者」「復興コミュニティビジネス」「「つたなさ」のテクノロジー」を紹介した。

こうして言葉を列挙してみてわかることは、実践や学習、道具や行為、そして具体的な実践へと術語が移り変わっていく点である。それは、現場力研究会のスタイルに、次第に幅ができてきたことを物語っている。書物の講読のみではなく、実践の発表、映像の鑑賞、ダンサーのトーク、私は参加していないが西成に出かけて行ってその場を知りつつ議論する等々。「現場」は予めあるわけではない。私たちが作っていくものである。作った現場を振り返って議論することで、新たな現場の特徴が立ち現れる。現場力研究会は、まさにそれを体現した場でもあったと思う。現場力研究会は、議論できること、実践することのほとんどを飲み込みつつ、変化する現場として今でも作られつつある。

4

ワークショップ：「からだトーク」

「現場力と実践知」「現場力研究会」とも連動して生まれた活動として「からだトーク」がある。いずれにも関わっている教員に、先述したジャワ舞踊家の佐久間さん、理学療法士の玉地さんを加えて、「身体」をテーマとしたワークショップを企画した。

CSCDには、オレンジの絨毯が教室一面にひいてあるオレンジショップ（*b）という場所がある。靴を脱いで絨毯の上にあがり、自由に場を作ることができる心地良い場所である。身体に馴染む場所だったので、ここで「からだトーク」を開催することが多かった。例えば、蚊取り線香の煙とともにふわふわ漂う。ドライアイスとともに地を這う。ここから出て、屋外の水たまりで踊る。満月の光に手をかざし、満月の暖かさを感じつつ月影と追っかけっこをする。ペットボトルの半分ほどに水を入れ、これを頭上において歩く（これは授業で行った）。水とともに歩いているような、何ともいえない感覚を経験するのだが、同時に、地球の中心と交流をしているような、地球と直接結びついているような感覚を得る経験でもあった。

この交わりの中で印象深かったのは、佐久間さんの、しなやかでまるで風のような、風になびく木の枝のような、周りの自然の延長のような身体の動きであり、リズムであり、存在感であった。佐久間さんの身体が風になびくような動きをすると、それが私たちの身体にまで地続きで伸びてくる。誘われているような感じもする。が、その自覚の手前で、既に身体が共鳴し始めるのだ。一緒に動こうとか、ダンスをしようとか、いろいろなことを考えるよりも先に、誘われて動いてしまっている。ダンスが始まってしまうのだ。勿論、動けない時もある。その時の違和感、それを感じていること自体が一種の応答と言えるだろう。私の身体が佐久間さんの身体から引きはがされている経験をしていると言ってよいかもしれない。

高齢者の作業所に行って、職員と一緒に踊ったこともあった。相手をケアしたり支援をしたりする仕事は、時にそれが過剰になったり、支援をしているつもりが管理をしてしまっていることもある。うまく自力で動けない人、動かない人などもいる。そのような人の身体を支える時に、無理やり起こしあげたり引きあげたり、志向性が向かっていない方に促そうとしたりすることもある。それでは、相手に負荷をかけているだけではなく、職員の身体も悲鳴をあげる。向かっている方向性が合っていないためだ。自分が知らず知らずのうちに陥ってしまっているこうした事態を捉え直すため、その前に、もっと身体を開く経験をするために、扇風機の風と舞った。折り紙も一緒に舞った。古い民家を作業所としているために、ワークショップをした部屋の真ん中に敷居があった。そ

れを超えて、二間を自在に動く。衝突もするが、それが心地よい。足を踏み鳴らす。そのリズムに陶酔してしまう。もう何が起こっているのかわからない。が、それが心地よい。その空間と一体化しているような、そこにいる皆と一体化しているような、何ともいえない感覚である。もはや一人ひとりの身体は問題にならない。

[写真] ワークショップ「からだトーク」

佐久間さんの身体の振る舞いに、知らぬ間に応答し始めている自分の身体を知って、このワークショップが「からだトーク」という名称であったことに、今更ながらハッとさせられた。“トーク”というのは、自覚的に行われている身体と身体との応答的な対話のみではなく、知らぬ間に誘い込まれ、気づいた時には既に応じてしまっている、身体がのっている、動こうとしている（準備性）、そのような事態をも内包している。私たちはいつも既に何らかの事柄に応答している。“からだトーク”は、こうしたはっきり自覚する手前で働き出してしまっている私たち自身の身体の営みを問い直し、再発見する機会だったと言える。そのためであろう、“からだトーク”に参加した後は、どっと疲れが出るが、同時にいろいろなことが気になってしまうようになる。身体の自覚は、世界を浮かびあがらせることでもある。“からだトーク”の後に世界と出会い直すことは、私にとって楽しみになった。

5

参加者の声：「コメントシート」

上述した３つの活動は、いずれもあまり明確に“目的”をもって行われていない。言い換えると、この授業を受けることによってこれが身に付く、この研究会を通してこれを実現させる、この活動を行いこれを伝える……そのようには表現していない、そのように表現し難い。それは、目的がないままに行われていたことを意味しているのではなく、強固な目的をもって目的志向的にこれらを行うことによって、本来の目的が果たせなくなることを避けるためである。目的を達成することを急ぐことによって、例えば、身体とじっくり付き合いその際に生じている事柄を感じることが難しくなる。目的を先取りして、多様な経験の可能性を捨象してしまう等々。そもそもはっきり自覚できていないようなことは、その場に立ち止まり、何かが立ち現れてくるまで待つしか方法がない。

授業を履修した大学院生たち、研究会への参加者、からだトークへの参加者等々は、どう思いながら「からだ」を経験したのだろう。授業では、毎回コメントシートを書いてもらった。そこに書かれていたのは、歩きながら感じていたこと、たくさんの人とぶつからないようにすり抜けていくときの感覚等々の授業に出て感じたことであった。他方で、教員と一緒に動いたり考えたりすることの新鮮さ、教員がしゃべりすぎでそれを阻止することの大変さ（グループワーク時）、ときに、何が期待されているのかがわからないこと等々も記されていた。

現場力研究会では、相互にコメントをし合っていたわけではないので、参加者が何を考えていたのかはわからないが、少なくとも、ほとんど休まずに出続けていた人がいたこと、いつも決まった日にそこに集まることを当たり前にしていた人がいたこと、集まって何らかの議論を始め、年に１回は、『「現場力」研究術語集』を執筆することが実現していたこと。それがすべてを物語っていると言っていいだろう。「現場力」は、新たな概念として洗練されるというよりも、皆で議論し続けることによって、つねに更新されていく、私たちの日常の営みとして定着している何かであるのだ。

“からだトーク”はどうだろう。この企画こそ、目的が見えにくい。他方で、別の目的、つまり身体に耳を傾けつつ楽しむことは実現していたと思われる。私たちの日常は、つねに成果が求められ、時間に追われ、人ごみに埋もれている。この状態は、身体が感じていることに敏感であることは求められない。あるいは、感じないように感覚に蓋をすることが強いられているのかもしれない。その状態を改善するのではなく、その状態を知ること、それとは違う状況に身を任せてみること、その状態から少し身を引いて、身体を休ませてみること。それによって、これまで気づいていなかった事柄に遭遇できる

かもしれない。世界は一様ではないことに気づくかもしれない。意味の多様性に気づくことは、我々にとって貴重な機会となるだろう。それが、「からだトーク」の醍醐味だ。

文献

— 中村雄二郎（1984）『術語集——気になる言葉』岩波書店。
— 田辺繁治（2003）『生き方の人類学』講談社。

リンク先

*a) 現場力研究会：http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/Genba_ryoku.html
*b) からだトークおよびオレンジショップ：http//www.cscd.osaka-u.ac.jp/join/orangecafe.php